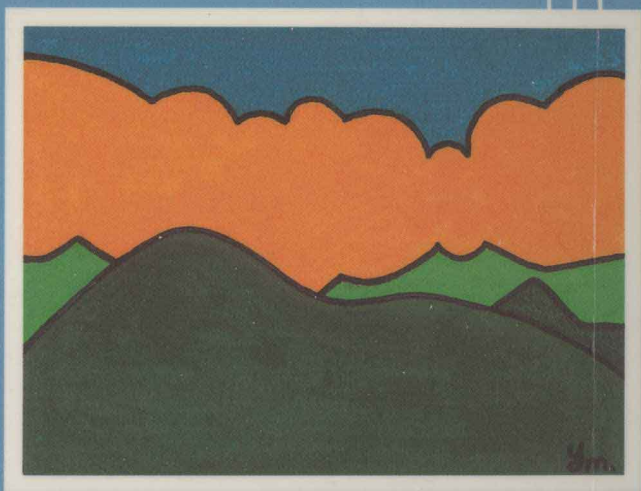


さっぽろ文庫 63

札幌文学散歩

札幌市教育委員会 編



さつぽろ文庫 63

札幌文学散歩

札幌市教育委員会編

＊本書は札幌市発行、同市教委編集のものを市販用として作成したものです。

執筆者（五十音順）

朝倉 賢（「くりま」の会同人）

倉島 齊（国学院短期大学講師）

石本 裕之（北海道札幌月寒高等学校教諭）

小松 茂（「札幌文学」編集人）

小笠原 克（藤女子大学教授）

田中 和夫（日本ペンクラブ会員）

加藤 敦子（札幌市西宮の沢小学校教諭）

長野 京子（北海道児童文学の会代表）

神谷 忠孝（北海道大学教授）

西村 信（「北方文芸」運営委員長）

川辺 為三（国学院短期大学助教授）

八重樫 實（「北の話」編集人）

北野 洸（「札幌文学」同人）

好川 之範（日本近代文学会会員）

木原 直彦（財北海道文学館館長）

和田 謹吾（北海道大学名誉教授）

資料提供・協力

財北海道文学館、財日本近代文学館、北海タイムス社、北海高校、(株)スタジオアングル、丹伊田範子

イラストマップ制作

(株)グレイン

さっぽろ文庫 63

札幌文学散歩

定価1340円（本体1301円）

1992年12月12日 印刷

1992年12月21日 発行

編集 札幌市教育委員会文化資料室

〒060 札幌市中央区大通西13 札幌市資料館内

著作権者 札幌市

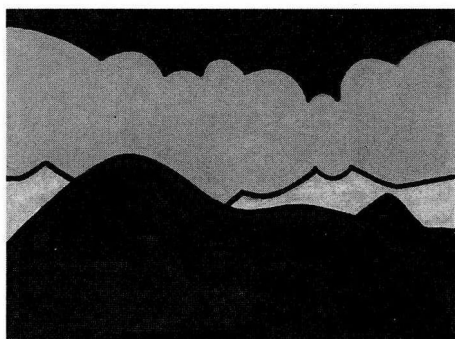
発行者 乳井洋一

発行所 北海道新聞社

〒060-91 札幌市中央区大通西3丁目

振替口座小樽〈9-28398〉

印刷 大日本印刷株式会社



文学の舞台 札幌

札幌市長 桂 信雄

「札幌文学散歩」の目次を追っていて、ふとむかし読んだ本を思い出しました。たしか次のような内容でした。名作と呼ばれる小説に魅かれて、その舞台になった道筋を、同じ季節に本を片手に歩いてみたのだそうです。すると、「遠い山なみや小さな草にまで、作者の目が鋭く注がれていて、その的確で効果的な描写に感嘆するばかりだったが、さらに驚いたことは、方向にしろ、時間、山や川や街にしろ、まるで旅行案内所か地図でもあるように正確そのものだった」というのです。

札幌を舞台にして書かれた多くの文学作品もそうなのでしょうか。

時代とともに札幌の街なみは変化しています。有島武郎の頃の札幌、船山馨が苦難の時代を生きた札幌、終戦間もなくの時期、あるいは今など札幌は刻々と変わっています。そこが実はヨーロッパの諸都市などと違っている点かもしれません。数十年前の作品を手に、今の札幌を歩いても、往時のおもかげをしのぶのは多分困難でしょう。

しかし、それぞれの時代に書かれた札幌を読むことで、その時期の札幌の姿や人々の息吹きを、文学の香気と一緒に正確に知るのは楽しいことだと思います。

ふだん見慣れている風景も、そこがもし文学にゆかりのある地であれば、感慨もあらたになるでしょうし、過去の姿と二重映しにしてさらに親しむこともできます。

活字ばなれの時代だとよく耳にすることがありますが、大通公園に建っている、有島武郎、石川啄木、吉井勇などの碑の前で、しばし目を凝らして碑文を読んでいる人を見かけます。文学には人の心を動かす力があるのでしょう。

一方、なつかしい文学の舞台も、時の流れとともに少しずつ姿を消していくのも現実です。でも、作品が残るかぎり、心の中に舞台は生き続けたと思いますし、札幌に美しい四季の移り変わりと、人々の暮らしがあるかぎり、これからも素晴らしい作品が生まれてくることでしょう。そしていつの日か、新しい「文学散歩」が編さんされることを期待したいと思いますし、それにふさわしい街づくりに精進したいと思います。

平成四年十二月

さっぽろ文庫 63 目次

文学の舞台 札幌 桂 信雄 2

(グラビア)

北大植物園

文学散歩マップ (都心部北・南、郊外)

空から見た札幌

第1章 文学の舞台を歩く 木原 直彦 9

1	開かれた街		10
2	駅前通り		16
3	赤レンガ		20
4	植物園		23
5	時計台		29
6	創成川		42
7	大通公園		49
8	繁華街―南一条から狸小路へ		67

9	薄野	77
10	中島公園	79
11	豊平川	82
12	豊平川右岸―平岸から真駒内へ	87
13	藻岩山・円山	91
14	北海道大学	99

第2章 作家たちの足跡（生年順）付・マップ

1	有島 武郎	神谷 忠孝	108
	プロフィール 時計台 遠友夜学校 恵迪寮		
	木田金次郎との出会い 新築の家 白官舎 すすきの		
2	石川 啄木	好川 之範	122
	プロフィール 漂泊の札幌二週間 下宿屋田中家跡		
	とスイートピーの女 北門新報社跡 橘林檎園跡		
	啄木の上京		
3	森田 たま	北野 洸	136
	プロフィール 素木しづとの出会い 姉の死		
	東京をめざして		

4 久保 栄 小笠原 克

プロフィール 帰省地・札幌 一枚の絵 「林檎園日記」
リアリズム理論と小説 ロマン『のぼり窯』 「火山灰地」

5 島木 健作 小笠原 克

プロフィール 慰問文「紀君」 ▲文学Vへの志

北中時代 朝倉菊雄から島木健作へ 北海道素材作の諸相

6 船山 馨 朝倉 賢

プロフィール 文壇登場まで 北国物語 ヒロポン地獄

復活と終命

7 澤田 誠一 西村 信

プロフィール 平岸林檎園 「北の夏」 天神山

8 原田 康子 神谷 忠孝

プロフィール 円山周辺 大通公園 藻岩山・豊平川

北大ローン 真駒内

9 高橋揆一郎 朝倉 賢

プロフィール 「友子」のくらし 「北の旗雲」の青春

「伸子」の世界

10 渡辺 淳一 川辺 為三

プロフィール 北海道三世の文学

札幌医科大学附属病院

北大と植物園 豊平川と藻南公園

札幌市豊平区とススキノ

エッセイの中の札幌

プロフィール 第三の故郷「札幌」

「またふたたびの道」

札幌オリンピック

第3章 ふるさと小説50選（作者生年順）

三遊亭円朝「椿説蝦夷なまり」 264

武林無想庵「因縁生」 266

長田幹彦「ゆく春」 268

宮沢賢治「修学旅行復命書」 270

宇野千代「わたしの青春物語」 272

更科源蔵「札幌放浪記」 274

本庄陸男「石狩川」 276

寒川光太郎「札幌開府」 278

今官一「牛飼いの座」 280

八木義徳「私の文学」 282

武田泰淳「サイロのほとりにて」 284

岩野泡鳴「放浪」 265

武者小路実篤「或る男」 267

橋外男「私は前科者である」 269

石森延男「コタンの口笛」 271

林美美子「月寒」 273

伊藤整「鳴海仙吉」 275

和田芳恵「暗い流れ」 277

長見義三「アイヌの学校」 279

石上玄一郎「鰓裂」 281

畔柳二美「姉妹」 283

八匠衆一「地宴」 285

瓜生卓造「札幌という街」 286

萩原葉子「女客」 288

三浦綾子「ひつじが丘」 290

吉行淳之介「札幌夫人」 292

夏堀正元「愛と別れの街」 294

比良信治「早春の旅」 296

佐々木逸郎「北海道ひとり旅」 298

相神達夫「新さっぽろ物語」 300

朝倉賢「札幌発札幌行き」 302

田中和夫「残響」 304

小檜山博「光る女」 306

佐々木丸美「雪の断章」 308

佐々木讓「死の色の封印」 310

沢井繁男「雪道」 312

北海道文学マップ

北海道文学碑マップ

あとがき

木野工「紙の裏」 287

北野洸「耳の中の虫の音」 289

八重樫實「氷の旗」 291

上西晴治「トヨヒラ川」 293

橋崎政「プラス・エックス」 295

吉村昭「神々の沈黙」 297

佐野洋「一本の鉛」 299

八柳鐵郎「すすきの有影灯」 301

五木寛之「青春の門」 303

加藤幸子「わたしの動物家族」 305

寺久保友哉「停留所前の家」 307

藤堂志津子「マドンナのごとく」 309

外岡秀俊「北帰行」 311

土居良一「夜界」 313

318 316 314

装画〈円山〉

カバーデザイン

松隈 康夫
浪内 一雄

第1章

文学の舞台を歩く

木原 直彦

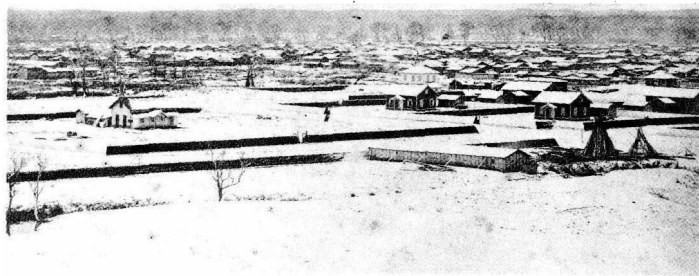
Ⅰ 開かれた街

「札幌というまちは、歩道を歩いているだけで、気分がいい。街を歩いていて、気分が秩序だつてくるといのが、都市性というものである」

歴史小説家の司馬遼太郎は平成四年、「週刊朝日」に連載中の紀行「街道をゆく・オホーツク街道」のなかにこう書いている。

いまだから百二十数年前、札幌は原始林のなかにあった。地名の語源はアイヌ語の「サツ・ポロ・ベツ」（乾いた大きな川）が転訛したもののだが、その《札幌》の地名についても司馬遼太郎は「音声としてすばらしいのは札幌である」と絶賛している。サツポロと書いても、さつぽろと書いても、シツクリと似合う街、それが札幌であらう。

明治二年（一八六九）に蝦夷地を《北海道》と名を改めたとき、札幌に開拓使が置かれることになつて札幌本府建設の鍬がおろされた。その札幌はいま百七十万人を超えるまでに成長したが、そ



明治6年の札幌

れは日本に例をみない近代都市の姿であり、一口にいって札幌は「開かれた街」なのである。

かつて函館生まれの文芸評論家亀井勝一郎は「北海道文学の系譜」と言つたもののその精神の傾向を大まかに言うなら、札

幌のピューリタニズム、小樽のリアリズム、函館のロマンチズムということになりそうだ。これは開拓者気質の三つの型と言ってもいいだろう」

（「北海道文学の系譜」と書いたが、きわめて適切な図式といえよう。さらに、こうも書く。「北海道固有の文学あるいは精神の種子をまいたのは、アメリカの宣教師と技師であった。潔癖な清教徒である南北戦争生き残りの勇士と、わが武士階級の子孫とがこの地で手を握った一時期がある。それはプロテスタントイズムと儒教精神との強烈な接木作用でもあったが、その源は札幌農学校で、ここから北海道文学の系譜は始まる」

亀井勝一郎が戦後の昭和二十九年（一九五四）にこのように書いた以前、札幌生まれの小説家島木健作は昭和十五年の随筆「札幌」のなかで「札幌と札幌農学校とを切り離して考えることはできない」と強調している。以下、要約すると、札幌が特色のある街だといわれるのは市街がゴバンの目だとかアカシアの街とかいうことのほかに、もつと精神的な意味がある。その多くの部分は札

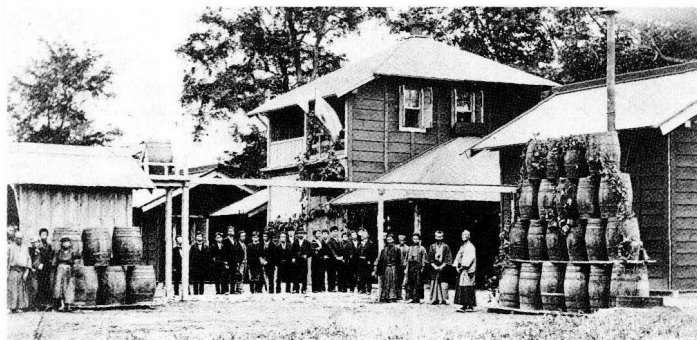
幌農学校、あるいは後身の東北帝国大学農科大学に帰すべきもので、札幌と大学との間には他の多くの都市において見られる以上に緊密な精神的つながりがあった。一方、札幌はなんとなくアメリカ臭い街だといわれてきたが、それはお雇い外国人に負うところが大きく、そして、キリスト教精神の最も純良なるものもまた、彼らにおいて生きていた。それ故にこそ、彼らに接触した日本の若い青年たちに偉大な人格的感化を与えたのである、「日本の武士道の精神に代るもの、新しい時代にふさわしい、精神の支え、よりどころを青年達は得た。というよりは、青年達は、日本人の魂をもつて彼等清教徒の精神を受け取ったのであった」

その象徴がウイリアム・S・クラーク博士の「ボーイズ・ビー・アンビシャス」（青年よ大志を抱け）ということになるが、そこから内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾、佐藤昌介というような人々が育ったのであり、この農学校に結晶されている精神というものは自然に札幌の知識階級の精神生

活の上にも影響した、と島木健作は結定づけている。

落語家の三遊亭円朝は明治の新文学誕生直前の代役を果たしたといわれるが、彼は札幌・函館・根室の三県が廃止されて北海道庁になった明治十九年（一八八六）に内務大臣山県有朋、外務大臣井上馨の随員として来道した。そのときの見聞を折り込んだ「椿説蝦夷訛」のなかに、草創期の札幌がこんなふうを描かれている。

「北海道石狩国札幌郡札幌は追々開けて、当今は街が東西南北に分れ、一条から六条まで幅広の道路がありまして、一条の中を大通りと申し、南（西）五丁目の間に北海道の本庁を置かれ、先年来小樽から幌内別（幌内）まで鉄道が連絡いたしまして、北六条に停車場ステーションがあります。一条の間に官立農学校があり、又本庁の敷地内に学校並びに病院があり、其裏手に養蚕室があり、又西二丁目に郵便局があり、大通りの左側に小学校があつて其前に電信局があり同南側に警察署があり、南二



札幌葡萄酒製造所（明治9年）

条に区役所があり、南北の中を流れる川の四方に落ちる川筋に二十一の橋が架つてあります。西八北三条東三丁目に麦酒と葡萄酒の製造場があり、二丁目に東本願寺、丸山（円山）に札幌神社があつて山林の植付所があります

(後略)

なかなか興味深い見取図だが、明治も末期になつて札幌はようやく都市型態を整える。そうした時代の札幌の気分を表現したのは、函館の大火に追われて明治四十年九月に札幌入りした二十一歳の歌人石川啄木であつた。

「札幌は寔に美しき北の都なり。初めて見たる我が喜びは何かに例へむ。アカシヤの並木を騒がせ、ポプラの葉を裏返して吹く風の冷たさ。札幌は秋風の国なり。木立の市なり。おほらかに静かにして人の香よりは樹の香こそ勝りたれ。大なる田舎町なり、しめやかなる恋の多くありさうなる郷なり、詩人の住むべき都会なり」

随筆「秋風記」の一節だが、啄木のこの直感、これほど札幌ッ子の心をくすぐる文章はほかにあるまい。

その二年後の明治四十二年八月に、自然主義文学の中でも特異な作家といわれる岩野泡鳴が札幌に姿を現した。三十六歳のときで、樺太のカニ缶詰事業に失敗して東京に帰るもならず、札幌の友

人宅にころがり込んだのである。それから十一月まで、泡鳴は札幌で放浪に似た生活を送つたが、その体験から「泡鳴五部作」といわれる大作のうち三部以降の「放浪」「断橋」「憑き物」が生まれた。ほぼ事実即して描いているが、札幌の描写が刻明であり、明治末期の札幌を知る格好の教材といつてよい。泡鳴によって俯瞰した札幌の街並みはこうである。

「ふと、札幌市街の自分が知らない部分を散歩して見る気が起」きた主人公の義雄はひとりでおらぶら歩いて見た。「道庁の構内をたつた五六本の白楊樹の高い影であるかの様な気持ちで通り抜け、郵便局(現時計台)の前に出で、豊平館(現市民会館)の横を通つて、水道(創成川)にかかった小橋を渡り、東部の町々をめぐり、それからまた西部を見た。

札幌は石狩原野の大開墾地に囲まれ、六万の人口を抱擁する都会で、古い京都のそれよりも一層正しく、東西南北に確実な井桁を刻み、それがこの都会の活きた動脈であるかの様に強い感じを与

える。そして、その脈は四方ともに林檎畑や、もろこし畑や、水田、牧草地などに這入って、消えてしまう。

その間に散在して、道庁を初め、開拓記念に最も好個な農科大学や、いつも高い煙突の煙りを以って北地を睥睨する札幌ビール工場や、製麻会社や、石造りの宏大な拓殖銀行、青白く日光の反射する区立病院や停車場、中島遊園（中島公園）、狸小路、薄野遊廓などがある。

一体に、大通りの南北ともに、停車場通りを中心として、西部の方が賑やかだ。繁栄な部分には、開拓者が切り残した樹木はないが、それでも、他方のアカダモ、イタヤ、白楊などの下を通して来る人の心には、至るところ、そう云う樹木の影がつき添って離れない様な気がする」

昭和十年代にあつて、札幌の雰囲気は的確に捉えたのは松前で生まれ小樽で育った伊藤整である。それは昭和十三年に書かれた随筆「札幌」だが、ここには札幌そのままの風景が抒情的に捉えられている。札幌の（風土）といつてもいい。

「札幌の街を歩いている気持は、ちよつと類のないものだ。近代的ではあるが、東京ともちがう。人に対するとき、買物をするときなどほぼ東京にいるような気持でやっていいようだが、ものの動きの緩慢さは全くちがう。緩慢なだけ田舎じみているという風でもない」。北海道伝統の生活力に指導を与えたり方法や組織を与えたりするのはやつぱりこの街であり、そういう頭腦的な落ちつきと自信というものが札幌の街上看る人々の表情のうちにあるようだ。「東京から来る人間は、やや東京的であつて、しかも落ちつきのあるこういう札幌の雰囲気に変調満足するようだ。そして札幌のこういう気分をエルクの樹や、ポプラの並木や広い閑雅な大通りや、郊外の牧場などの風景と結び合せて、北海道という印象を築きあげる。なるほど、それは札幌という土地に具体化された北海道である。それは結局美しいものと言うことすらできるであらう。風景はやや外国風であり、人々は知的で、おっとりしている」

この文章に呼応するように、札幌生まれの船山